

研究者リーダーシップ・プログラム

「第1回 参加者による自己紹介とリーダーシップについて」参加レポート

正直なところ、参加前はこのプログラムに対して、漠然としたモヤモヤと、「リーダーシップ」という概念への疑問を抱いていました。しかし、今回東村先生の講義を受けたこと、それぞれ異なる研究環境や課題を抱えている他の参加者の方々の話を聞いたことで、「リーダーシップ」というものが少し見えてきたように思いました。

東村先生のお話の中で最初に強い衝撃を受けたのは、いくつかのネガティブとともとることができるデータを示された上で、「今からこれらをポジティブに変えていきます」という力強い言葉を聞いたときでした。よく「平等」と「公平」について、イラストを用いて説明されることがありますが、そもそもそれはバリアとなっているものに対してどう扱うかということであり、そもそもの構造的なバリア自体をなくす方が本質的であるという点は非常に納得感がありました。根本的な解決を図るというのは、研究においても特に重要な視点だと感じました。

リーダーシップについて最も印象深かったのは、「自分ができることは当たり前他の人もできると思っていないか」という問いかけでした。特に「頼りないリーダーでもいい」という考え方は新鮮で、完璧な「リーディング」を追求する必要がないという気づきを与えてくれました。「リーダー」を務めるにあたって、「有意差が出たからって面白くなかったら放っておいた方がいい」という視点は、サイエンスにおいて重要な指摘だと感じました。また、「楽しそうにやっていることをさらに伸ばす」という発想は、研究者として何を大切にすべきかを再考させてくれました。

特に心に響いたのは、「悲観主義は気分だが、楽観主義は意志である」という言葉でした。また、「断らない！」フレーズも印象的でした。表面だけ聞くとよく聞くフレーズだと思いますが、実際に東村先生のお話を聞いた後に聞くと大変説得力があり、実際の姿勢として意識をしていきたいと思いました。

今回最大の収穫は、リーダーシップが何か特別なものではなく、多様な人材との協働を通じて発揮される実践的なスキルであると感じ取ることができた点です。自分なりのリーダーシップスタイルを模索していきたいと思いました。

(岡部格明・名古屋大学大学院医学系研究科 研究員(学振PD))